

演題17

光重合型コンポジットレジンGRAFT LC II の臨床的評価（第1報）

○西田郁子、牧 憲司、森本彰子、
内上堀征人、木村光孝
九歯大・小児歯

目的：本来、前歯部用修復材として開発された複合レジン、高分子科学の発達や接着剤の開発により、その耐久性は年々増加している。そして、審美性の良さ、使用の簡便さ、さらに光重合型レジンが開発されたことでその利用率はますます高まっている。今回、私達は、最近開発された光重合型レジンGRAFT LC II（G C社製）を用いて修復し、臨床的に検討した。

対象および方法：九州歯科大学附属病院小児歯科外来を受診した小児62人を対象とした。対象歯はC₂ 齲蝕を有する乳前歯30本、幼若永久前歯25本とし、修復部位は、各歯牙の隣接面である。窩洞は軟化象牙質を齲蝕検知液（Caries Detector、クラレKK）を指標としてラウンドバーで削除した後、# 2球形カーバイトバーを用いて窩洞形成した。また、保持形態の付与は行わなかった。Fuji lining LC（G C社製）塗布後、エッチング処理を行い、ボンディング剤塗布後、光重合型複合レジンであるGRAFT LC IIを窩洞内に填入し、光照射した。硬化後、エアータービン用のwhite point を用い、咬合調整および研磨を行った。リコール時に各修復歯牙に対して、臨床的に観察した。

結論：①1年経過後、辺縁適合性が良好なものは乳前歯では28例、幼若永久前歯では20例であった。②1年経過して形態的変化の認められないものは乳前歯では28例、幼若永久前歯では22例であった。③修復物の着色・変色のみられたものは乳前歯、幼若永久歯ともに2例のみであった。④辺縁部の変色が認められたものは乳前歯では27例、幼若永久歯で24例であった。⑤二次齲蝕のみられなかったものは乳前歯では29例、幼若永久歯では23例であった。⑥修復時の歯髄反応はほとんどみられず、乳前歯で1例歯髄処置が必要であった。⑦1年経過後のリコール時の歯髄反応において何ら異常の認められなかったものは、乳前歯では26例、幼若永久歯では23例であった。以上のことからGRAFT LC IIは、乳前歯および幼若永久歯の修復に対して有効であることが示唆された。